4/12/2016

＊キリスト教学演習＊＊＊＊

S. Ashina

＜オリエンテーション＞

Ａ．テーマ：キリスト教思想の基本文献を読む

キリスト教思想を理解し、研究するには、その基本的な文献を広くまた深く読むことが必要である。この演習では、近代以降のドイツ語による文献を精読することによって、キリスト教思想研究に必要な文献読解力の向上をめざす。

今年度は、ティリッヒの教義学に関わる文献から、次のものを取り上げ、演習を行う。

Ｂ．テキスト

Paul Tillich, *Frühe Vorlesung im Exil (1934-1935)*

(Ergänzungs- und Nachlaßländе zu den Gesammelten Werken XVII, De Gruyter, 2012)

Ｃ．成績などについて

・平常点による。（受講者には、数回の発表担当を課するが、その発表内容と、毎回の演習への参加度とから総合的に判断する。）

・使用するテキストについては、コピーを配布する。

・参考文献：授業中に紹介する。

・受講生には、キリスト教思想に対する関心と積極的な授業参加（参考文献による復習を含め）を期待したい。質問は、オフィスアワー（木２・金３）を利用するか、メール（アドレスは、授業にて指示）で行うことができる。

Ｄ．授業（予習＋出席・発表＋復習）の進め方

１．演習参加者の役割

(1)授業前：読み・訳す・分析する　→　問題点・補足事項。

(2)授業での発表：順番に読み・訳す。質疑。討論。

(3)授業後：残った問題を検討する。

・前期半期：4/12, 19, 26, 5/10, 17, 24, 31, 6/7, 14, 21, 28, 7/5, 7/12, 19

・次回：4 月 19 日は、「導入講義２」を行い、メンバーと担当の確定を行う。

演習は 4 月 26 日から開始。

＜導入講義１＞（『キリスト教学研究室紀要』（第４号、2016 年）掲載論文の校正前原稿）

ティリッヒとその思想的遺産――生の現象学を中心に――

一　はじめに

ティリッヒは、20 世紀のプロテスタント神学と宗教哲学が置かれた問題状況を体現した思想家の一人であり、20 世紀を理解する上で、象徴的な位置を占めている。しかし、ティリッヒの思想は、バルトやブルトマンらの同世代の思想家と同様に、19 世紀の思想との対決継承を推し進めつつも、その思想的遺産は 21 世紀を射程に入れている。本稿で

は、ティリッヒの死後に展開されてきたこの半世紀の思想状況を念頭に、ティリッヒの思想的遺産を論じてみたい。[1] ティリッヒの思想的遺産と言っても、その範囲はティリッヒが取り組んだ問題領域に対応して広範な内容が指摘できる。しかし、ティリッヒの思想的遺産としては、次のものを挙げれば、その意義は十分に理解することができるであろう。それは、同世代の思想家と比較しても、著しいものと言える。

１．宗教的多元性と宗教間対話[2]

２．エコロジーの神学[3]

３．科学技術の神学[4]

本稿では、生の現象学という視点から、ティリッヒの思想的遺産とその意義について考察を試みたい。それによって、ティリッヒの思想を再構築するとともに、21 世紀の現代におけるキリスト教思想の可能性についても、一定の展望が見出されるであろう。

まず、続く「二」では、ティリッヒの「生の現象学」構想自体を概観し、その議論の明確化が行われる。それを前提に「三」では、生の現象学をさらに展開するための再構築を試みてみたい。そして、最後の「四」では、上に挙げた諸問題を含めた、ティリッヒの思想的遺産について再度議論が行われる。

以下は、Ｗｅｂ公開資料では省略。
京都大学学術情報リポジトリ（http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/210116）を参照のこと。